

資料

架け橋プログラムへの教育実践方法学からのアプローチ

An Approach from the Viewpoint of Educational Practice Methods of the Kakehashi-Program

小野間正巳*¹, 丸山真理子*¹, 藤本 美英*²

要約: 幼稚園から小学校への進学にあたり、その間の幼児と児童の間で生じる小1ギャップが問題となって久しい。幼児教育と小学校教育の接続の問題は、戦前の旧制度下から戦後の教育改革を経て現在に至るまで続いている。幼児期と小学校をつなぐ（連携、接続）架け橋が必要であるのか、その必要性や改革の理念は何なのか、小学校に入学してどのような問題が生じているのか、共通認識はされているのか、遊び中心の幼児教育を科学的に分析した実践理論や実践方法論が少ないのではないのか。特に、小学校で学ぶ内容が、幼児期の子供たちの遊びや生活とどうつながっているのか、小学校に入学して学習におけるつまづきの問題は何なのか、その原因は幼児期にあるのかそれとも小学校教育にあるのかなど、明らかにされていないことも多い。それらの内容は、保幼小の接続をめぐる政策動向や幼児教育と小学校教育の接続に対する様々な考えの違いや歴史的な経緯によることが多い。

そこで、本論では、接続をめぐる政策動向や研究成果に着目し、その研究成果、特に研究理論に基づいた実践内容を対象に分析を行い、その成果及び課題から今後の教育実践方法学の課題を明確にすることを目的とする。研究対象は、概ね現行学習指導要領が施行された2013（平成29）年以降の論文を主に選択する。この研究作業から保幼小の接続に関する問題と今後の教育実践方法学の課題を明らかにし、その結果を生かして、架け橋プログラム試案を提案する。

Key Words: 幼小接続、スタートカリキュラム、アプローチカリキュラム、教育課程

1. 問題の所在と課題

幼稚園から小学校への進学にあたり、その間の幼児と児童の間で生じる小1ギャップが問題となって久しい。幼児教育と小学校教育の接続の問題は、戦前の旧制度下から戦後の教育改革を経て現在に至るまで続いている。1989（平成元）年には、改訂された小学校学習指導要領において、小学校低学年（1, 2年）の社会科・理科が廃止され、生活科が新設された時から現代まで、接続の課題は残されたままである。その対策として令和5（2023）年2月に中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会は「学びや生活の基盤を作る幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」⁽¹⁾（以下、「令和5年答申」とする。）を取りまとめた。そのねらいは、幼児教育施設と小学校は、3要領・指針及び小学校学習

指導要領に基づき、幼児教育と小学校教育を円滑に接続することの必要性を提言した。その接続期を「架け橋期」と称し、その時期の教育の充実とそのためのカリキュラムの作成及び評価の工夫によるPDCAサイクルの確立を認めた。これに先んじて、次に示す2つの答申を受けての答申となっている。

1つは、平成29年の公示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、「3要領・指針」とする。）において、小学校教育との円滑な接続を図るよう努めることが明記された。

2つは、令和3年1月中央教育審議会は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（答申）⁽²⁾（以下、「令和3年答申」とする。）を取りまとめた。この答申では、全ての子供が格差なく質の高い学びへと接続できるよう、幼児期の教育から小学校教育への充実に努めることを求めている。

山口⁽³⁾は、幼稚園・保育所における幼児期の教育から、小学校における学童期の教育への移行期からである「接続期」に共通のカリキュラムを策定することの意義

2023年11月7日受付／2024年1月10日受理

*¹ ONOMA Masami

MARUYAMA Mariko
関西福祉大学 教育学部

*² HUIJIMOTO Mie

赤穂市立城西幼稚園・修士課程 M1

と、「接続期カリキュラム」に基づく教科指導や保育を
実践する上での課題を、長野県内の自治体における教師・
保育者を対象とする実態調査を通して明らかにしようと
試みた。ここでは、「接続期カリキュラム」については、
県内の認知度が66.8%にとどまっており周知が十分でな
いこと、指導要録等については、「参考にしない」という
小学校教諭が半数を超えるものの「参考にしない」20%
と保育士側との意識の違いがあることを明らかにした。

では、なぜ、幼児期と小学校をつなぐ（連携、接続）
架け橋が必要であるのか。その必要性や改革の理念は何
なのか。小学校に入学してどのような問題が生じている
のか、共通認識はされているのか。遊び中心の幼児教育
を科学的に分析した実践理論や実践法方法論が少ないの
ではないか。特に、小学校で学ぶ内容が、幼児期の子供
たちの遊びや生活とどうつながっているのか、小学校に
入学して学習におけるつまづきの問題は何か、その
原因は幼児期にあるのかそれとも小学校教育にあるのか
など、明らかにされていないことも多い。それらの内容
は、保幼小の接続をめぐる政策動向や幼児教育と小学校
教育の接続に対する様々な考えの違いや歴史的な経緯に
よることが多い。

そこで、本論では、接続をめぐる政策動向や研究成果
に着目し、その研究成果、特に研究理論に基づいた実践
内容を対象に分析を行い、その成果及び課題から今後の
教育実践方法学の課題を明確にすることを目的とする。
研究対象は、概ね現行学習指導要領が施行された2013
（平成29）年以降の論文を主に選択する。この研究作
業から保幼小の接続に関する問題と今後の教育実践方法
学の課題を明らかにし、その結果を生かして、架け橋カ
リキュラム案を提案する。

2. 研究方法

本研究を行うにあたり、次に示す方法で進めていく。
まずはじめに、公開されている論文を中心として、「ア
プローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」「接続
期カリキュラム」「保幼小接続」「架け橋カリキュラム」「実
践」をキーワードにしてWeb検索を行なう。それら
の中から、概ね現行学習指導要領が施行された2013（平
成29）年以降の論文を主に選択する。現行学習指導要
領では、幼稚園において「幼児期の終わりまでに育つて
ほしい姿」が明確化され、小学校においては、小学校入
学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュ
ラム」の充実が示され、加えて幼小、小中、中高の学校

段階間の円滑な接続の必要性が示されたことによる。ただ
し、それ以前の大事な示唆を示している論文については
対象として扱った。これらの論文について「教育課程ま
たは教育制度、接続期カリキュラム」「アプローチカリ
キュラム」「スタートカリキュラム」に分類して成果を
明らかにした。

分析対象とした論文の内訳は、以下の通りである。

- ①教育課程または教育制度、接続期カリキュラム
・・・5編
- ②アプローチカリキュラム
・・・13編
- ③スタートカリキュラムに関する論文（生活科を含む）
・・・12編

この結果を基に、新たに文部科学省から示された「架
け橋プログラム」について、その内容を整理する。それ
らの成果を基にして、兵庫県A市を対象とした「架け橋
プログラム案」を作成する。

3. 分析結果

(1) 教育課程または教育制度、接続期カリキュラム

小学校教育と幼児教育の違い、接続期の教育と生活科
教育について、松嵜・無藤⁽⁴⁾は、文部科学省が設置した「幼
児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する
調査研究協力者会議」報告書（2020）の「小学校教育と
幼児教育の違いから接続期の教育と生活科教育につい
て、東京都における接続期カリキュラムの検討を行った。
その結果、

- 幼稚園と小学校では、子どもの発達段階や指導内容・
方法をきちんと理解したうえで、円滑な接続のために
すべき指導を確実に行うためにも、保育者と教師が幼
稚園教育と小学校教育を十分に理解すること。
- スタートカリキュラムの内容分析から、スタートカリ
キュラムは、生活科の特徴を反映した内容であり、接
続期における教育の中心的な役割を果たしているこ
と。
- 幼児教育の中で育てられた児童の気づきをしっかりと
受け止め、その上で、その気づきを科学的な思考や論
理的に考える力へと育て、学びの基礎となるような指
導を行うことを明らかにした。

福元⁽⁵⁾は、幼小接続カリキュラムの政策動向につい
て学校改革を志向するアプローチと小1プロブレムを予
防するアプローチの2つに整理し、近年の教育改革の内
容と特質を検討した。その結果、前者では幼小接続カ
リキュラムが、幼児教育における「学習の基盤」の概念を

軸に教育改革の国家戦略として推進され、教育現場への浸透と「協同的な学び」の構築が施行されることを指摘した。また、後者では、小学校の「スタートカリキュラム」が、生活科の実践を学校への児童の適応にすり替える問題を生じさせていることを指摘した。

濱田他⁽⁶⁾は、幼保小接続カリキュラムの意義と課題について明らかにするために、小学校の幼保小連携担当教諭と幼稚園園長を対象としたインタビューを実施した。その内容は、接続カリキュラムを幼小で協同作成した意味、子どもにとっての意味、課題である。その結果、①なじみによる安心感②幼小の教員の関係性構築③保育・教育の省察と子ども理解の深化の契機④子どもの育ちにつながるつながりに対する意識が見出されるという考察結果を導き出した。

平成27年学習指導要領が、保幼小連携を意識することによる幼稚園「学校化」、知識重視の「学校」教育と異なる小学校教育の方向へのシフトが見込まれることで「主体性」「各教科等を横断」という言葉の使用により、これまで幼児教育が大切にしてきた「子ども主体」「領域」に近い印象を受ける。こうした矛盾した状況と捉えた鳥越⁽⁷⁾は、小1プロブレムに関する研究及び、小学校1年生の学校適応に関する研究や小学校接続に関する実践研究を概観することで接続期の問題を整理した。その結果、環境変化から生じる子どもたちの不安を低減させよう力を見極めるとともに、それを「育成すべき資質・能力」として位置づけることが今後の保幼小接続期の教育課程を編成するうえ重要であることを提言した。

さらに、発達心理学の観点から、藤谷⁽⁸⁾は、接続期のカリキュラム創造について発展と課題について提起した。幼小接続期は、幼児期の教育・保育から小学校教育に移行する際の子どもの学びを保障していくための時期という意味をもつことから、この時期の教育課程として、幼稚園のアプローチカリキュラム、小学校のスタートカリキュラムが実践されてきた。これをさらに発展させるためには、小学校教員と保育者が協働して接続期カリキュラムを創造することが求められているため、接続期の子どもの発達と学習の特徴を発達心理学の観点からとらえなおすことが必要であると考えた。そこで、メタ認知、協同性、自己制御という3つの側面から検討し、それらの発達を視点として子どもと教育・保育を評価していくことについて考察した。その結果、幼小接続期カリキュラムの創造のためには、特にアプローチカリキュラムにおけるカリキュラム・マネジメント、スタートカリ

キュラムにおける幼児期の経験を踏まえた協同的な学習の形成に、小学校教員と保育者の協働が必要であり、効果が期待できるとした。

(2) アプローチカリキュラム

藤谷・橋本⁽⁹⁾は、アプローチカリキュラムの「期間」「ねらい」について、埼玉県草加市、大分県、横浜市の先行事例の分析を行った。その結果、「期間」は、5歳の10月から3月の就学前まで。「ねらい」は、①小1プロブレムの解消のため②幼稚園と小学校と交流を盛んにし、幼児が安心して移行できるようにするため③「幼小連携事業」を遂行するためであることにまとめた。今後の課題として、「イベント的なものが多い」「アプローチカリキュラムの制作のための主旨が＝幼小連携と捉えていてカリキュラム名が様々であり、内容も同義に扱われている」であることを指摘した。

岡花・津川・七木田⁽¹⁰⁾らは、遊びを中心としたアプローチカリキュラムの可能性について、保育園における「学校ごっこ」実践の検討を通して明らかにしようとした。其の結果、「habitus：特定の状況における適切な雰囲気をつかんだり、何が求められるかを理解するような実践感覚」を小学校という独自の文化のなかに入ればそれなりに振る舞えるといった実践感覚の涵養が必要であることを指摘した。また、「学校ごっこ」の実践は、現実の学校ではなく、想像世界の「学校を遊ぶ」経験を通して、学校での振る舞い(habitus)や、教師や学習への向き合い方を先生役の保育者を媒介としながら経験していくことで「小学生としての自分」を演じ、学校の世界へと一歩歩みを進めるきっかけになることを明らかにしている。

池田・杉野ほか⁽¹¹⁾は、アプローチカリキュラムについて言及された研究の動向を整理し、今後の課題について検討した。関連する文献をアプローチカリキュラムの考え方、実態、行政および現場における取り組みに対する分析・評価という観点で整理した。その結果、アプローチカリキュラムには、小学校の準備教育ではないことを前提とする「連続性」が求められることではあるが、多くの事例において、カリキュラムの具体化への現場の苦慮が示唆された。また、行政主導による現場の連携とともに、現場間の連携やカリキュラムの有効性の検討、保育者養成機関による、連携の関与やカリキュラムの科学的根拠が求められることを指摘した。

田中⁽¹²⁾は、Y市における幼保小接続・連携の実践を

検討することで、今後の幼保小接続・連携を充実させるためのカリキュラム・マネジメントのあり方を考察した。そこで、Y市が作成・実施した「接続期カリキュラム」について、分析・考察と中学校区で進められた教育活動の実践と合同研修を振り返り、効果、改善点、課題を抽出し、カリキュラム・マネジメントのあり方の問題点を探った。その結果、幼保小交流では小学校に進学した時の姿を見通して実践するが、実践結果をカリキュラムにどう反映させていくかについて、双方での共通理解に課題があることが明らかとなった。

藤谷⁽¹³⁾は、小学校教員と保育者が協働して幼小接続期カリキュラムを想像することが課題としてありとし、この課題解決のために接続期の子どもの発達と学習の特徴を発達心理学の観点からとらえ直すことが必要であると考えた。そこで、メタ認知・協同性・自己制御の3つの側面から検討し、それらの発達を視点として子どもと教育・保育を評価していくことについて考察した。幼小接続期カリキュラムの創造のためには、特にアプローチカリキュラムにおけるカリキュラム・マネジメント、スタートカリキュラムにおける幼児期の経験を踏まえた協同的な学習の形成に、小学校教員と保育者との協働が必要であり、その効果が期待できることを示唆した。

(3) スタートカリキュラム

松嵩⁽¹⁴⁾は、入学直後の小学校1年生を対象に、生活科を中心としたスタートカリキュラムの実践内容の詳細を明らかにして子どもの学びの様子を吟味すること及び小学校入学後の子どもの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の見取りから、幼児教育を生かした小学校教育のあり方を検討した。実践事例から、①スタートカリキュラムの実践では、はじめてのことでも積極的に知ろうとしたり自ら学ぼうとしたりする姿が見られ、友達を気遣ったりクラスの雰囲気を作っていく様子が見られた。②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、入学後にも看取ることができ、時期が経つにつれて見取ることができる人数や項目数は増加した。生活科等の教科の学びは人やものと関わることでさらにその姿が延びる様子が見られた。幼児教育の学びとつながるスタートカリキュラムの実践によって子どもたちは自分の力を発揮して主体的に学び、さらにその姿を延ばしていたことを明らかにした。

野口・鹿間⁽¹⁵⁾は、スタートカリキュラムにおける「質の高い気付き」を促す指導プログラムの開発を行った。

生活科の単元である「学校たんけん」を実践することを通して、児童の原初的な「気付き」を授業者が言語化し、各種資料を示して思考する場面を設定する手立てにより児童の内部の「問い」を表面化させることが極めて有効であることを明らかにした。

齋藤⁽¹⁶⁾は、福島県郡山市におけるスタートカリキュラムの実施状況及び内容や子どもたちの実態について調査を行った。その結果、スタートカリキュラムの実施により、時間的、学習形態的、学習環境的にも柔軟に対応することができるようになった。組織として対応し、新入学児を見守る体制が整ってきている。今後の課題として、小学校教員の研修、アプローチカリキュラムは幼児期の学びを小学校教育につなげるものであることの認識をもつことを挙げている。

江川・松井⁽¹⁷⁾は、スタートカリキュラムに取り組む教員の意識について、実践経験者へのインタビューと実践期間中の担当教員同士の対話をもとに事例的研究を行った。その結果、①スタートカリキュラムの取組を経験したことのある教員を対象に、意識や実践内容等についてインタビューし、KJ法を用いて分析した。そして、「カリキュラム内での活動の工夫を考える」「子どもへの負担を危惧する」「安心スタートプランの意義を見出す」「運営での大変さに悩む」「学校体制で臨む安心感」という5つの意識を見出した。②期間中担当している教員の同士の対話内容KJ法的な手法で分析した。これら2つの研究を通して、担当教員は子どもの負担や運営の大変さなどの課題をもちながらも学校全体に支えられているという安心感をもって、スタートカリキュラムに取り組み、日々評価と改善を繰り返していることを明らかにした。また、スタートカリキュラムは「活動ありき」の形式的なものではなく、「子どもありき」で活動を進めていこうという意識を持ち続けている教員によって実践されており、意味あるカリキュラムとして学校全体に共有されているという背景があることも明らかにしている。

大室・西出⁽¹⁸⁾は、田村（註）の提唱するモデルを援用して、スタートカリキュラムのカリキュラム開発や継続的な実践に向けた要素及び要素間のつながりについて考察した。その結果、実効性のあるカリキュラムにするには、「具体的なスタートカリキュラムを学級担任が授業で実践する実践者からのアプローチ」と「学級担任の授業実践を支える校長をはじめとしたリーダー行動からのアプローチ」の2点から考えていくことが必要である

ことを指摘した。さらに、スタートカリキュラム推進のポイントとして次の4点を指摘した。

- (A) 共有ビジョンとスタートカリキュラムのつながり
- (B) 組織化（仕組みづくり）と活動の重点化
- (C) 2つのPDCAサイクル（「管理サイクル」と「改善サイクル」）の意識化
- (D) 協働文化の形成～「学び合う教員集団」と「内発的改善意欲の情勢」

である。

伊東・大垣内⁽¹⁹⁾は、幼児教育と小学校教育の学びを円滑に接続するためのスタートカリキュラムの編成及びそれを活用した小学校入学時の指導と効果について、次の3点の検証を行った。①教育委員会の関与の有無によるスタートカリキュラムの編成及び理解の進捗②スタートカリキュラムに基づく指導による児童の生活や学習における安心感③スタートカリキュラムに基づく指導による学びの改善である。そして、これらを検証するにあたって、2つの方法をとった。1つは、教育委員会が関与してカリキュラム編成を行う自治体と学校独自で編成して行う自治体との比較。1つは、小学校におけるスタートカリキュラムに基づく実践事例の収集。これらの研究を通して、教育委員会が編成関与している自治体の方が指導についての計画性、検証改善による持続性や発展性が高まることが明らかとなった。さらに、接続期のカリキュラムとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を中心にアプローチカリキュラムを結合させることで、幼保小の連携や相互理解が進み、それが実践に結び付き児童の安心感や学びの連続性につながったことを明らかにした。

(4) 先行研究の整理と今後の研究課題

①教育課程または教育制度、接続期カリキュラム

この分野の研究では、主に幼稚園と小学校間について扱い、幼小間の連携の実情と課題を指摘している。連携が円滑にいくためには、幼稚園と小学校の保育者と教師が幼稚園教育と小学校教育を十分に理解すること。スタートカリキュラムは、生活科の特徴を反映した内容であり、接続期における教育の中心的な役割を果たしていること。幼児教育の中で育てられた児童の気づきを学びの基礎となるような指導を行うことなど示唆に富む指摘がなされている。さらに、幼保小接続カリキュラムの意義と課題について明らかにするための幼保小連携担当教諭と幼稚園園長を対象としたインタビューを実施し、①

なじみによる安心感②幼小の教員の関係性構築③保育・教育の省察と子ども理解の深化の契機④子どもの育ちにつながるつながりに対する意識が見出されるという考察結果を導き出した。また、発達心理学の観点から、接続期のカリキュラム創造について発展と課題について、小学校教員と保育者が協働して接続期カリキュラムを発達心理学の観点からとらえなおすことが必要であると提起した研究が行われた。この研究では、メタ認知、協同性、自己制御という3つの側面から検討し、アプローチカリキュラムにおけるカリキュラム・マネジメント、スタートカリキュラムにおける幼児期の経験を踏まえた協同的な学習の形成に、小学校教員と保育者の協働が必要であり、効果が期待できるとした報告をしている。

②アプローチカリキュラム

アプローチカリキュラムに関する研究では、「学校ごっこ」実践の内容分析を行い、「habitus：特定の状況における適切な雰囲気をつかんだり、何が求められるかを理解するような実践感覚」を小学校という独自の文化のなかに入ればそれなりに振る舞えるといった実践感覚の涵養が必要であることを指摘した。また、アプローチカリキュラムの考え方、実態、行政および現場における取り組みに対する分析・評価という観点で整理し、行政主導による現場の連携とともに、現場間の連携やカリキュラムの有効性の検討、保育者養成機関による、連携の関与やカリキュラムの科学的根拠が求められることを指摘した。小学校教員と保育者が協働して幼小接続期カリキュラムを想像することが課題としてあり、この課題解決のために接続期の子どもの発達と学習の特徴を発達心理学の観点からとらえ直すことが必要であると考えた。そこで、メタ認知・協同性・自己制御の3つの側面から検討し、それらの発達を視点として子どもと教育・保育を評価していくことについて考察した。幼小接続期カリキュラムの創造のためには、特にアプローチカリキュラムにおけるカリキュラム・マネジメント、スタートカリキュラムにおける幼児期の経験を踏まえた協同的な学習の形成に、小学校教員と保育者との協働が必要であり、その効果が期待できることを示唆した。

入学直後の小学校1年生を対象に、生活科を中心としたスタートカリキュラムの実践内容の詳細を明らかにして子どもの学びの様子を吟味すること及び小学校入学後の子どもの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見取りから、幼児教育を生かした小学校教育のあり方を検討した。実践事例から、①スタートカリキュラムの実

践では、はじめてのことでも積極的に知ろうとしたり自ら学ぼうとしたりする姿が見られ、友達を気遣ったりクラスの雰囲気を作っていく様子が見られた。②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、入学後にも見取ることができ、時期が経つにつれて見取ることができる人数や項目数は増加した。生活科等の教科の学びは人やものに関わることでさらにその姿が延びる様子が見られた、幼児教育の学びとつながるスタートカリキュラムの実践によって子どもたちは自分の力を発揮して主体的に学び、さらにその姿を延ばしていたことを明らかにした。

③スタートカリキュラム

スタートカリキュラムにおける「質の高い気付き」を促す指導プログラムの開発を行った研究では、「学校たんけん」を実践することを通して、児童の原初的な「気付き」を授業者が言語化し、各種資料を示して思考する場面を設定する手立てにより児童の内部の「問い」を表面化させることが極めて有効であることを明らかにした。さらに、スタートカリキュラムの実施状況及び内容や子どもたちの実態について調査を行った結果、スタートカリキュラムの実施により、時間的、学習形態的、学習環境的にも柔軟に対応することができるようになったことを明らかにした。また、スタートカリキュラムに取り組む教員の意識について、実践経験者へのインタビューと実践期間中の担当教員同士の対話をもとに事例的研究を行った結果、「カリキュラム内での活動の工夫を考える」「子どもへの負担を危惧する」「安心スタートプランの意義を見出す」「運営での大変さに悩む」「学校体制で臨む安心感」という5つの意識を見出した。そして、スタートカリキュラムのカリキュラム開発や継続的な実践に向けた要素及び要素間のつながりについて考察し、実効性のあるカリキュラムにするには、「具体的なスタートカリキュラムを学級担任が授業で実践する実践者からのアプローチ」と「学級担任の授業実践を支える校長をはじめとしたリーダー行動からのアプローチ」の2点から考えていくことが必要であることを指摘した。さらに、接続期のカリキュラムとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を中心にアプローチカリキュラムを結合させることで、幼保小の連携や相互理解が進み、それが実践に結び付き児童の安心感や学びの連続性につながったことを明らかにした。

4. 架け橋カリキュラムに基づいた地域のカリキュラム

(1) 架け橋カリキュラムの概要

中央教育審議会は、2022（令和3）年1月に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」⁽²⁰⁾（以下、「令和3年答申」という。）を取りまとめ、2020年代を通じて実現すべき教育の姿を示した。概要は以下の通りである。

現在、文部科学省では、1人1台端末の整備や小学校35人学級の計画的整備等を進め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成し、多様な個性を最大限に生かすため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等の取組を着実に進めている。このような学びの充実を一層確実なものとするためには、幼稚園・保育所・認定こども園（以下、「幼児教育施設」という。）といった施設類型を問わず、また、家庭や地域の状況にかかわらず、全ての子供が格差なく質の高い学びへと接続できるよう、幼児期の教育から小学校教育への教育の充実を図ることが必要となる。とりわけ、教育基本法において「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」として規定される幼児期の教育と小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子供の成長を中心に据え、関係者の立場を越えた連携により、発達の段階を踏まえた教育の連続性・一貫性の基に、接続期の教育の充実に取り組むことが必要である。とした。そして、この答申を受け、文部科学省は、「幼保小の架け橋プログラム」について次のように定義した。

「子供に関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指すもの」である。そこで、文部科学省では、令和4年度から3か年程度を念頭に、全国的な架け橋期の教育の充実とともに、モデル地域における実践を並行して集中的に推進していくこととした。

さらに、中教審の初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」は「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」⁽²¹⁾を取りまとめ2月27日に公開した。幼児教育と小学校教育を円滑に接続するため、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」として、全ての子供が格差なく質の高い学びへ

と接続できるよう幼児期及び架け橋期の教育の質を保障するため、以下の方策を推進することが示された。

【1. 架け橋期の教育の充実】

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携認定こども園教育・保育要領（以下、3要領・指針）および小学校学習指導要領に基づき、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて、子供の資質・能力や学びの連続性を確保し、幼保小接続期の教育を充実する。

- ①子供の発達の段階を見通した架け橋期の教育の充実
- ②架け橋期のカリキュラムの作成及び評価の工夫によるPDCAサイクルの確立

【2. 幼児教育の特性に関する社会や小学校等との認識の共有】

幼保小が保護者や地域住民などの参画を得ながら、架け橋期の教育の充実を図るためには、幼児期に育まれた資質・能力が小学校教育にどのようにつながっているか、関係者がイメージを共有し、実践する必要がある。また、学びや生活の基盤を育むため、幼児教育施設がどのような工夫をしているかについて理解を広げる。

- ①幼児教育の特性に関する認識の共有
- ②ICTの活用による教育実践や子供の学びの見える化

【3. 特別な配慮を必要とする子供や家庭への支援】

- ①特別な配慮を必要とする子供と家庭のための幼保小の接続
- ②好事例の収集

【4. 全ての子供に格差なく学びや生活の基盤を育むための支援】

核家族化による子育て支援者の不足や、地域とのつながりの希薄さなど、家庭や地域の教育力が低下している昨今、子供にとって幼児教育施設が安全・安心な居場所であるとともに、子供の学びや成長を保障する幼児教育施設の役割の重要性が一層増している。

- ①幼児教育施設の教育機能と場の提供
- ②全ての子供のウェルビーイングを保障するカリキュラムの実現

【5. 教育の質を保障するために必要な体制等】

幼児教育の現場において、設置者や施設類型を問わず、幼児教育の質の向上や幼保小の接続等の取組を一体的に推進するため、地方自治体において必要な体制を構築することが必要。また、多忙な勤務環境が幼児教育施設での勤務を志望する者の減少や離職者の増大に大きく影響を与えていることから、外部専門職などの積極的活用やICT環境の整備をはじめ、勤務環境の改善を図ることが急務とされる。

- ①地方自治体における推進体制の構築

- ②架け橋期の教育の質保障のために必要な人材育成等
- ③幼児期の教育の質保障のために必要な人材確保・定着等

【6. 教育の質を保障するために必要な調査研究等】

質の高い教育を保障していくためには、方法論的に正当な調査・研究から得られた実証データの分析によるエビデンスに基づきながら、政策形成に取り組むことが求められる。また、幼児教育の質保障の方策としては、幼児教育の質や子供の発達と成果のより客観的な評価に向けて、具体的な評価指標を開発し活用する。

- ①幼保小接続期の教育に関する調査研究
- ②幼児期の教育に関する調査研究である。

(2)「架け橋プログラム」を意図した試行^(註1)

丸山は、兵庫県M市立幼稚園において、幼児が主体的に活動する中から、ものの見方・考え方を学ぼうとする活動「ミニトマトの『はかりんぼう』」を実践した。本園では、毎年取り組んでいる一鉢栽培がある。5歳児から「みんなでミニトマトの栽培をしたいな」の多くの声が開かれた。そこで、今年は、ミニトマトの成長に興味・関心を持てるように、教師手作りの「ものさし『はかりんぼう』」を取り入れたミニトマト栽培に取り組んだ。その様子を以下のとおりである。

【展開】

ミニトマトが生長してくるとどの子もその生長に興味をもち始め、登園すると進んで計る子が次第に多くなってきた。ミニトマトの生長に合わせて、はかりんぼうの長さが足りなくなれば、紙を足していくようにした。「はかりんぼう」を利用するで、子どもたちが生活の中で、数に関心をもつ様子が多く見られるようになった。

例えば、

「はかりんぼう」を使って幼稚園のウサギやプランターの大きさをはかる子。

雨の日、友達と傘を並べて立てて「僕の傘の方が高いな」と気づいた子。

上靴の大きさを比べて次のような会話が似られた。

B児「Aちゃんの方が大きいよね。」A児「うん、きっとそうだ！」B児「先生、上靴見て！」「Aちゃんの上靴の方が大きいんだよ！」教師「どうして分かるの？」

B児「見てたら、Aちゃんの上靴の方が大きい分かるの」教師「すごいやん！頭の中ではかりんぼう出来て

表1 架け橋プログラム(案)

| 幼稚園・小学校接続期カリキュラム | | | |
|--|---|---|--|
| 10の姿 | 9～10月 | 11月～12月 | |
| ア プ ロ ー チ 期 に 身 に つ け たい 資 質 ・ 能 力 | 健康な心と体 | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな運動に興味をもち、進んで行く。(C) ・友達と積極的に体を動かす活動に取り組み(C)、友達とルールを守って一緒に遊ぶ充実感を味わう。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・災害などの緊急時の適切な行動が分かり(A)、安全に行動しようとする。(C) ・寒暖を感じながら(A)運動や戸外遊びを意欲的に行う。(C) |
| | 自立心 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの目的に向かって力を出し(C)、遊びや生活を進める楽しさを知る。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割を認識し(A)、責任をもって取り組む。(C) |
| | 共同性 | <ul style="list-style-type: none"> ・友達と役割を分担したり、力を合わせたりして遊びや生活を進める。(C) ・友達や教師といろいろな活動をする中で、必要なルールを作ったり試したりする。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・友達と協力して一つの目的に向かって遊びを進める。(B) ・遊びに必要なものが分かり(A)友達と相談したり思いを出し合ったりしながら(B)、遊びをつくったり進めたりする。(C) |
| | 道徳性・規範意識の芽生え | <ul style="list-style-type: none"> ・友達同士の仲間意識ができ(C)、自分たちでルールをつくって遊びを進めていこうとする。(B) ・ルールを守ること、遊びが楽しくなったりおもしろくなったりすることに気付く。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・場を整えたり物を大切にすることを学び(A)、使い方や片付け方を工夫し(B)、丁寧に扱おうとする。(C) ・自分の思いを話したり、相手の考えを受け入れたりし(B)、折り合いを付けて遊ぶようになる。(C) |
| | 社会生活との関わり | <ul style="list-style-type: none"> ・祭りや地域の行事で見たことや経験したことを遊びに取り入れる。(B) ・園外保育で公共の場でのマナーや約束事を知り、意識して行動する。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びや生活に必要な情報を、幼稚園内外の様々な環境から取り入れ(A)、分かったことを伝え合ったり活用したりしながら(B)遊びを進めていく。(C) ・年末の生活や社会事象などに関心をもつ。(C) |
| | 思考力の芽生え | <ul style="list-style-type: none"> ・興味のあることやものについて考えたり試したりする。(B) ・自分と異なる考えがあることに気付く。(A) ・自分のしたい遊びを実現するために、作り方や適切な材料を考えたり、工夫したりしようとする。(B) | <ul style="list-style-type: none"> ・素材の感触や性質などに気付き(A)、調べたり活用したりし(B)自然物を使って様々な遊びを楽しむ(C)。 |
| | 自然との関わり・生命尊重 | <ul style="list-style-type: none"> ・秋の自然に興味や関心をもち(C)、虫捕りをしたり、草花で遊んだりする。(B) ・秋の自然物を見つけたたり、遊びに使ったりする。(B) ・動植物の命に気付き(A)、命を大切にすることを学び(A)、命を大切にすることを学ぶ。(C) | <ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然の美しさを感じ(A)、季節の移り変わりに関心をもつ。(AC) ・自然物を種類ごとに分けたり、工夫して遊びに取り入れたりする。(B) ・サツマイモの収穫を喜ぶ。(C) |
| | 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | <ul style="list-style-type: none"> ・集めた自然物の形や大きさ、数などの違いや特徴に気付く。(A) ・行事のなかで、さまざまな国旗に親しみ、いろいろな人や国があることを知る。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・生活の中の言葉や文字、標識などに関心をもち、工夫して遊びに取り入れる。(B) ・遊びや生活の中で、数えたり、競ったり見通しをもったりする。(B) |
| | 言葉による伝え合い | <ul style="list-style-type: none"> ・思ったり、感じたりしたことを自分なりの言葉で相手に伝えようとする。(A)(B) ・みんなで共通の話題について話し合うことを楽しむ。(C) | <ul style="list-style-type: none"> ・しりとりや言葉集めなど、クラスの友達と言葉遊びを楽しむ。(C) ・相手の気持ちに気付き受けとめ、相談し合いながら遊びを進めようとする。(B) |
| | 豊かな感性と表現 | <ul style="list-style-type: none"> ・リズムに合わせてたり、友達と動きを考えたりして表現する。(B) ・友達と共通の目的に向けて、自分の感じたこと、イメージしたことを素直に表現する。(B) ・様々な絵本に親しみイメージを広げる。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・様々な素材や用具を利用して(B)、イメージを実現しようとする。(C) ・絵本や自分の経験から(A)、イメージを豊かに膨らませ、動きや言葉で表現する。(B) |
| ☆教師の援助 ○環境構成のポイント | <ul style="list-style-type: none"> ○幼児の興味や関心に合わせて十分に活動できる時間や場を確保する。 ○秋の自然に触れたり、自然物を遊びに取り入れる機会をもつ。 ☆挑戦したり、試行錯誤したりする姿を認めたり、共感したりして自信がもてるようにする。 ☆自分たちで行事を進める充実感を味わっていきけるよう支える。 | <ul style="list-style-type: none"> ○知的好奇心や探求心をもって活動に取り組めるよう、様々な材料や道具を準備する。 ○友達と相談したり、協力したりできるような十分な時間と場を保障し、見通しをもち、継続して活動が行えるようにする。 ☆友達と思いを伝えあい、自分たちで問題を解決する姿を見守りつつ必要に応じて互いの思いをつないでいく。 ☆遊びや生活がより楽しく充実していくように互いのよさに気付き、認め合えるよう支える。 | |

(A) 知識及び技能の基礎 (B) 思考力、判断力、表現力等の基礎 (C) 学びに向かう力、人間性等

| 幼稚園・小学校接続期カリキュラム | | | | |
|---|--|--|---|---|
| 1月～3月 | 4月第1. 2週 | 4月第3週 | 4月第4週 | 5月第1. 2週 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・手洗い消毒マスク着用など健康な体づくりに興味をもち、進んで行く。(A) ・戸外で十分に体を動かしていろいろな運動遊びに取り組む。(A) | <ul style="list-style-type: none"> ・入学した喜びを味わおう。 ・先生と仲良くなるよう | <ul style="list-style-type: none"> ・友達の名前を覚え、自分のことも知ってもらおう | | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人や先生方、友達に、自分から元気よくあいさつができるようになろう。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・園生活を通して、場面に応じた行動を自分なりに考えてする。(B) ・自分で決めた課題に向かって諦めず、挑戦しようとする。(C) | | <ul style="list-style-type: none"> ・所持品の準備や片付けの仕方を覚えよう。 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・友達と共通の目的に向かって役割を分担したり、ルールを決めたりし (B)、主体的に遊びを進める。(C) | <ul style="list-style-type: none"> ・給食の準備や片付けを友達と協力して行おう。 | <ul style="list-style-type: none"> ・友達と仲良く安全に過ごし、楽しく活動したり遊んだりしよう。 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・トラブルや困ったことがあると、互いの立場に立って話し合ったり、ルールや決まりを考えたりして (B)、自分たちで解決していこうとする。(C) | <ul style="list-style-type: none"> ・1年生の教室の使い方やどんなものがあるかを知ろう。 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・小学校との交流等を通し、小学校に関心をもち、入学に喜びと期待を感じるようになる。(C) ・修了に際して、親や祖父母等の愛情を感じ (A)、家族を大切にしようとする。(C) | | | <ul style="list-style-type: none"> ・学校や学級の約束を知り、約束を守って落ち着いて過ごそう。 | <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇小学校のいろいろな教室の場所や使う目的をしろう。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・予想したり確かめたり試行錯誤したりしながら (B) 友達と共通のテーマのもとに遊びを進める。(C) | | | <ul style="list-style-type: none"> ・学校の日課に少しずつ合わせて生活しよう。 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然事象に興味や関心をもち (C)、性質や変化、仕組みに気付き (A)、考えたりしながら遊ぶ。(B) ・冬から春への季節の移り変わりに気付き、不思議さなどに思いを巡らせながら (B)、友達と一緒に発見を楽しむ。(C) | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・文字や数量、図形などに関心をもち (C) 遊びや生活に用いようとする。(B) ・かるたやトランプ遊びの中で、数えたり比べたりしながら (B)、文字や数についての興味や関心を深める。(C) | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。(B) ・場面や状況、相手に応じた適切な言葉を使う。(C) | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・感じたことや想像したことを言葉や体、音楽、造形など、様々な方法で表現して楽しむ。(B) | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ○自然と触れ合う機会を大切にし、発見したり、試行錯誤したりする楽しさを十分に味わえるような環境を工夫する。 ○クラス全体で協力しながら取り組めるような活動を取り上げ、協同する充実感や達成感を味わわせる。 ☆互いのよさを認め、子ども同士のつながりがさらに深まるような援助をする。 ☆園生活を振り返り、一人一人が自信をもち、仲間とのつながりを実感して、就学を迎えられるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○児童達の様子に合わせて、学習時間を徐々に伸ばしていく。 ☆児童達に学校生活への意欲と安心感をもたせる。 ☆保護者が安心できるように情報を公開したり、学校生活を知らせたりする。 ☆児童達一人ひとりの様子を観察し、個に応じた支援をし、信頼関係を作る。 ☆連休後の児童の様子をきめ細やかに観察しながら、学校の通常日課に適応させていく。 ☆参観会や学級懇談を通して保護者との信頼関係を築いていく。 | | | |

るのね！」B児「それで、答えを見るには、上靴の後ろ（裏）を見たらわかるねん！」「ほらっ！17（cm）と18（cm）！」

このように、子どもたちが楽しんで主体的に活動する中で、子ども自身が学んでいることを自覚しない「無自覚な学び」の中で数に触れ、それを自分たちの生活の中に取り入れている様子が見られた。子どもたちが楽しいと感じて活動することは、子どもたちが対象と主体的にかかわる中で自分の学びとなり、ものの見方・考え方につながっていくと考える。このような子どもの学びは、小学校入学後においても継続していくことから、幼児期の指導において、教師は、幼児が主体的に学んでいるという意識を持ちながら、幼児とかわることにより幼児期の学びが小学校において活かされると考える。

(3)円滑な保幼小連携を図る「架け橋カリキュラム」案^(註2)

これまでの先行研究の分析及び実践を基にして、以下のような兵庫県A市立幼稚園・兵庫県A市立小学校間の円滑な連携のための「架け橋プログラム」(表1)を作成した。

5. おわりに

幼稚園から小学校への進学は、以前より課題が多様な取り組みがなされてきた。本研究においては、このような課題を解決するためには、幼稚園と小学校の連携が非常に重要であること、特に、お互いの教職員の意志の確認、報告、連絡、相談が必要であることはもちろんのこと、教育委員会の財政や制度や人的な面における積極的なかわりが求められる。また、幼稚園と小学校においては、教員一人ひとりが連携の意味や役割について十分に理解し合うことが求められる。そして、児童についての情報交換に着いても定期的な話し合いを行うことで幼稚園教育と小学校教育の円滑な移行が求められる。そこで、このような課題を解決するためには、幼稚園と小学校の教育課程編成に基づいたカリキュラム編成案の作成を行った。その際に、文部科学省が示す「幼稚園の終わりまでに育ってほしい10の姿」を念頭において、このカリキュラム案に沿って幼稚園と小学校の教育実践を行い、その実態からさらに修正改善を行ってより良いものしていくことが課題である。

【文献及び註】

- (1) 中央教育審議会答申(2023)「学び舎生活の基盤を作る幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の充実～」, 文部科学省
- (2) 中央教育審議会(2023)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(答申)」, 文部科学省
- (3) 山口美和(2016)「幼保小連携における『接続期カリキュラム』の意義と課題」, 長野県短期大学紀要, 第70巻, pp.155-167
- (4) 松壽洋子・無藤隆(2013)「小学校生活科と幼児教育とのつながり－接続期カリキュラムの検討を通して－」, 白梅学園大学・短期大学教育・福祉センター研究年報 No.18, pp.39-48
- (5) 福元真由美(2014)「幼小接続カリキュラムの動向と課題－教育政策における2つのアプローチ－」, 教育学研究,
- (6) 濱田祥子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃(2019), 「幼小接続カリキュラムの意義と課題－保育者と小学校教諭に対するインタビューから－」, 比治山大学短期大学部教職課程研究第5巻, pp.24-33
- (7) 鳥越ゆい子(2016)「保幼小接続期における教育課程の検討－次期学習指導要領の「育成すべき資質・能力」をふまえて－」, 帝京大学教職指導研究 Vol.1 No.1, pp.193-197
- (8) 藤谷智子(2022)「保幼小連携から接続期カリキュラム創造への発展と課題－発達心理学の観点から－」, 武庫川女子大学大学院教育学研究論集第17号, pp.23-31
- (9) 藤谷貴代・橋本忠和(2017)「アプローチカリキュラムの現状と課題についての一考察：埼玉県草加市・大分県・神奈川県横浜市の先行事例の分析を通して」, 北海道教育大学紀要(教育科学編)第67巻第2号, pp.245-256
- (10) 岡花祈一郎・津川典子・七木田敦(2016)「遊びを中心としたアプローチカリキュラムの可能性－保育園における『学校ごっこ』実践の検討を通して－」, 幼年教育研究年報第38巻, pp.15-23
- (11) 池田孝博・杉野寿子・大久保淳子・鷲野彰子・中原雄一・伊勢慎(2021)「保幼小連携におけるアプローチカリキュラムに関する研究の動向と課題」, 福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol.29, No.2, pp.215-223
- (12) 田中裕子(2020)「幼保小接続・連携を充実させるためのカリキュラム・マネジメント」, 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部教職研究, pp.85-99

- (13) 前掲 (7)
- (14) 松崎洋子 (2018) 「幼児教育の学びを生かしたスタートカリキュラムの実践」, 千葉大学教育学部研究紀要第 66 巻 第 2 号, pp.91-98
- (15) 野口徹, 鹿間幸男 (2015) 「小学校入学時のスタートカリキュラムにおける『質の高い気付き』を促す指導プログラムの開発-生活科単元『学校たんけん』における児童の『問い』に注目して-」, 山形大学教職・教育実践研究 No.10, pp.29-36
- (16) 齋藤和代 (2015) 「スタートカリキュラムについて考える」, 福島大学総合教育研究センター紀要第 19 号, pp.99-106
- (17) 江川紗恵・松井千鶴子 (2020) 「スタートカリキュラムに取り組む教員の意識に関する事例的研究」, 上越教育大学教職大学院研究紀要第 7 巻, pp.165-174
- (18) 大室道夫・西出勉 (2021) 「『つながる』スタートカリキュラムの実践を目指して～アンケートの自由記述からのアプローチ～」, 藤女子大学人間生活学部紀要第 58 号, pp.59-71
- (19) 伊東直人・大垣内亜紀 (2023) 「『スタートカリキュラム』を活用した小学校入学時の指導と効果-教育委員会の関与による効果と実践事例の検証を通して-」, 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要人文科学・社会科学編第 6 号, pp.21-34
- (20) 前掲 (3)
- (21) 中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 (2023) 「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」
- (註 1) 丸山が「架け橋プログラム」を意識して実践した内容である。ここでは、幼児期と児童期との学びについて、幼稚園において子どもが主体的に学んでいけるよう環境づくりが大切であることを指摘している。
- (註 2) 藤本が、赤穂市立幼稚園において作成した「架け橋プログラム」をもとにして加筆修正を行い作成し、小野間が小学校内容について加筆した。